

日本における先秦史の研究動向と課題

江 村 治 樹

目 次

- I はじめに
- II 殷周史研究
 - 1 甲骨、金文の基礎研究
 - (1) 甲骨文
 - (2) 金文
 - 2 殷周国家の構造に関する研究
 - (1) 殷周関係の問題
 - (2) 殷王朝の構造
 - (3) 周王朝の構造
- III 春秋戦国史研究
 - 1 秦漢帝国の形成に関する研究
 - (1) 1960年代まで
 - (2) 1970年代以後
 - 2 春秋史研究
 - (1) 1970年代まで
 - (2) 1980年代以後

I はじめに

日本における先秦史、すなわち殷周・春秋戦国史の主要な課題の一つは、次の秦漢史にどのように整合的に繋ぎ合わせるかと言うことではないかと思われる。ただし、この課題の解決の方向は、大きく二つに分かれている。一つは、国家形態の継起的展開としてとらえようとする考え方であり、氏族制社会から都市国家、領土国家を経て秦漢帝国の展開を想定する。このような考え方は、貝塚茂樹、宮崎市定氏など⁽¹⁾を代表とする比較的古い世代の研究者に多い。この考え方の特色は、中国古代史の発展にギリシャ、ローマあるいはオリエントと同じような発展を想定しようとするものであり、殷周史研究者に比較的多く受け入れられている。これに対して、この時代を秦漢帝国の前史として、氏族制社会とその解体の時期として一括して見なす考え方

があり、西嶋定生、増淵龍夫氏などを代表とする秦漢史研究者⁽²⁾に多く受け入れられている。この考え方は、中国の古史分期論争、とくに侯外廬氏の考え方の影響を強く受けたものとみなされる。そして、この見方は中国古代史の展開を、ギリシャ、ローマとは異なる特殊中国的なものにとらえようとするところに特色がある。この両者の間には、相手方の見方に対するある一定の配慮は認められるものの、両者の立場には現在でも大きな断絶が存在する⁽³⁾。

しかし、日本において、殷周史研究者と秦漢史研究者の間に断絶を形造っている原因は、このような研究上の立場だけでなく、史料上の制約も大いに係わっている。すなわち、それは甲骨、金文を史料として用いねばならない殷周史研究の特殊性である。周知のように、甲骨、金文の解読が行なえるようになるためには、多大の労力と時間を費やさねばならず、これだけで一つの学問領域を形成している。したがって、日本においては、先秦史研究者という専門家が成立することは困難であり、実質的に殷周史研究者、春秋戦国史研究者、秦漢史研究者というように細分化する傾向にある。このような傾向は、最近の出土資料の増加や研究論文の増加によってより強まりつつあるように思われる。したがって、日本の先秦史研究の状況を整理、紹介する場合、先秦史として一括して行なうのではなく、殷周史と春秋戦国史を分離して行なうのが適切ではないかと思われる。そこで、ここでは、甲骨、金文によらざるを得ない殷周史研究と、秦漢帝国の前史としてとらえる傾向の強い春秋戦国史研究とを分離して紹介する。

II 殷周史研究

日本における殷周史研究の目覚ましい進展が見られるのは、戦後になってからであるが、その展開は『甲骨学』（日本甲骨学会）の刊行と軌を一にしている。『甲骨学』は、1951年に哲、史、文にわたる全国の殷周に関心のある研究者によって発行され、1961年まで、毎年あるいは隔年で刊行された。そして、1964年に第10号が出されて以後永く休刊となるが⁽⁴⁾、ちょうど休刊となる前ぐらいまでが、日本における殷代史研究の高揚期とみなすことができる。そして、以後、研究者の関心はしだいに西周史研究に移っていく。殷周史研究については、以上の変化を念頭に置きながら研究の状況と問題点を見ていきたい。

1 甲骨、金文の基礎研究

(1) 甲骨文

考古資料である甲骨文を歴史資料として活用するには、まず編年を行なわねばならない。甲骨文の編年は董作賓氏によって基本的な部分は確立されたが、その後、いくつかの修正が行なわれていることは周知のとおりである。日本においては、戦争中、貝塚茂樹氏が東方文化研究所（戦後、京都大学人文科学研究所）所蔵の甲骨の中に、書体上、董氏の断代に合わないものを発見したが⁽⁵⁾、これは戦後、伊藤道治氏の協力のもとに「甲骨文断代研究の再検討—董氏の文武丁時代卜辞を中心として」（東方学報〈京都〉23, 1953）としてより展開された。ここで、両

氏は、董氏が文武丁卜辞とした、いわゆる王族卜辞、多氏族卜辞を、貞人名、先王の称谓、出土の坑位などから、やはり第一期とみなした。この見方は、その後、殷王朝の構造を考える上で一定の影響を与えた。

この他、殷王朝の構造解明のための基礎を与えた研究として、島邦男『祭祀卜辞の研究—甲骨卜辞の研究』(弘前大学文学研究室, 1953)⁽⁶⁾が重要である。本書は、先王、先妣の周祭、すなわち五祀の論証を主要部分とし、外祭である上帝、自然神、高祖神、先臣神についても論じ、殷王朝の祭祀系統の全体像の解明を試みたものである。この中でもとくに、五祀の論証は、当時我国で知られていなかった董作賓氏の研究ともほぼ一致しており、当時の研究のレベルの高さをうかがうことができる。

釈字、釈文については、白川静氏に『甲骨金文論叢』1～9(油印本, 1955～58)⁽⁷⁾という大部な仕事がある。本書の内容は題名のごとく、甲骨文のみに限定されないが、「史」「文」「冊」「師」などの釈字の他、「召」「鄭」「羌」など国族の研究を含む。また、池田末利氏には「殷墟書契後編釈文稿」(甲骨学4・5, 1956, 同10, 1964。後、広島大学中国哲学研究室油印, 1964)がある。末次信行氏には、殷代表作説があるが⁽⁸⁾、最近氏は、『殷代気象卜辞の研究』(玄文社, 1991)によって、その説を補強するとともに、気象関係卜辞の総合的、全体的な解明を試みている。

索引については、島邦男『殷墟卜辞綜類』(大安, 1967)⁽⁹⁾の重要性は現在でも薄れてはいない。本書は約3000字の卜辞を分類し、用語例を列挙したものであり、甲骨文研究だけでなく、中国古代史研究者にとっても欠かせない甲骨文字索引となっている。貝塚茂樹編『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字索引』(同研究所, 1968)は、次にふれる同研究所蔵の甲骨文字の著録の索引であるが、『甲骨文編』、『続甲骨文編』の未讀字、誤讀字を解説、訂正しており、これら二索引を補う性格を有している。

日本で所蔵されている甲骨についても、さかんに公刊が進められている。とりわけ大部なものとしては、貝塚茂樹編『京都大学人文科学研究所蔵甲骨文字』(同研究所, 本文編・1959, 図版編1960)と松丸道雄編『東京大学東洋文化研究所蔵甲骨文字—図版編』(同研究所, 1983)があり、前者は3576片、後者は1356片の甲骨を収録している。とくに、後者は拓本だけでなく鮮明な写真が付されていること、鑽鑿の部分にも拓本、写真が付されていることに特色があり、今後の甲骨著録のあるべき方向を示している。この他、甲骨の紹介としては、青木木菟哉「書道博物館蔵甲骨文字」1～5(甲骨学6～10, 1958～64)があるが、これは模本のみで紹介である。日本各地に散在している甲骨の紹介と釈読を精力的に行なっているのは伊藤道治氏である。氏は、京都大学人文科学研究所のもの以外に、9ヶ所の甲骨の紹介を行なっている⁽¹⁰⁾。また、松丸道雄氏にも「日本散見甲骨文字蒐彙」1～6(甲骨学7～12, 1959～80)がある。この他、東洋文庫古代史研究委員会『東洋文庫所蔵甲骨文字』(東洋文庫, 1979)も公刊されている。

日本における甲骨文の基礎的研究のうち、釈字については字形にもとづく研究が中心であったが、その行き詰まり状態はかなり早くから現れていた。上述の殷代史研究の退潮は、こうした基礎的研究の行き詰まりによるところが大きい。しかし、1980年前後から、言語学的方法による打開の模索が始まる。このような方法の研究は、まずカナダ、アメリカを中心として活動中の高嶋謙一氏に始まるが⁽¹¹⁾、伊藤道治氏も早くからその必要性を強調している⁽¹²⁾。また、近年、甲骨文の本質を改めて検討しなおそうとする傾向も出てきている。松丸道雄氏は、同一貞人の書風や書体の多様性から、貞人以外に契刻の専門家の存在を予想している⁽¹³⁾。また、高嶋謙一氏は、「殷代貞ト言語の本質」(東大東洋文化研究所紀要109, 1989)において、甲骨文が殷人にとってどのような意味があったのか、従来の説を整理検討しながら、言語学的観点から考察を加えている。ただし、これらの方向の研究も、日本では若手の研究者が育っておらず、十分な進展をみているとはいいがたい。

(2) 金文

殷周金文の編年の研究は、日本が最も進展しているように思われる。日本における金文の編年は、貝塚茂樹氏による、西周金文の群別研究法の批判的紹介に始まるが⁽¹⁴⁾、その後は考古学者による青銅器の形式学的編年が中心となって進展する。早くは、水野清一「殷周青銅器編年の諸問題」(東方学報23, 1953)、樋口隆康「西周銅器の研究」(1963, 『展望 アジアの考古学』新潮社, 1983) などがあるが、両氏の批判の上に、初めて殷周金文全体の形式学的編年を完成したのは林巳奈夫氏である。氏は、『殷周時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覧1』2冊(吉川弘文館, 1984)の大冊において、当時日本で器影の知りうる限りの殷周、春秋前期の青銅器を検討し、その図版篇で代表的なもの計3541点を器種ごとに編年して提示した⁽¹⁵⁾。これによって、我々は殷周金文の大部分を歴史資料として利用するための確かな基礎を得たことになる。この他、西周金文の編年に手がかりを与える方法として暦譜の編成がある。白川静氏などがこの試みを行なっているが⁽¹⁶⁾、近年、浅原達郎氏は、従来の暦譜編成上の問題点を明らかにし、だれもが納得できる最低共通部分の確立を目指している⁽¹⁷⁾。

伝世金文を歴史資料として利用する場合、基本的な問題としてその真偽の問題がある。松丸道雄氏には「殷周金文の真偽問題」(史学雑誌79-12, 1970)があるが、これより前から、この松丸氏も参加して、京都大学人文科学研究所の林巳奈夫氏の研究班で「金文弁偽の会」が開かれており、その成果は「西周金文の弁偽をめぐって」(甲骨学11, 1976)という形で紹介されている。考古学的出土品の増加にともなって、異例なものも真物とせざるをえない場合が増え、真偽の判定は容易でないということが研究班での最終的な結論のようである。

釈字、釈文については、白川静氏には、前述の『甲骨金文論叢』があるが、氏にはこの他に『金文通釈』56冊(白鶴美術館, 1962-84)というきわめて大部な仕事がある。本書の主要部分は、西周、春秋時代の代表的な金文(標目器249点とその関連器)を編年し、諸説を整理して釈文、注釈を付したものである。ただし、金文学の歴史、研究方法、金文による西周史の復原、

文字索引なども含み、本書はいわば殷周金文学総書とでも言うべきものである。この他、まとまった金文の釈読としては、赤塚忠「西周初期金文考釈」1, 2 (甲骨学7, 8:1959, 60), 同『稿本殷金文考釈』(油印, 1959, 『中国古代の宗教と文化』角川書店, 1977)があるが、日本では、個々の金文に対する釈読はあまり盛んとは言えない⁽¹⁸⁾。釈字についてややまとまったものとして、内藤戊申「金文札記」1~4 (甲骨学4・5, 6, 8, 10:1956, 57, 60, 64)があるが、この方面の研究もあまり行なわれていない。

金文研究においても、1980年前後から、新しい研究方法やその本質を問いなおそうとする傾向が現れてくる。林巳奈夫「殷—春秋前期金文の書式と常用語句の時代的変遷」(東方学報<京都> 55, 1983)は、氏の青銅器の形式学的編年を基礎に、歴史資料としてはあまり顧みられてこなかった短い銘文を中心に、書式、用語、常用句などについて時代ごとに整理したものである。本論文は、殷周関係、西周の政治・社会体制の変質、作銘の本質など、殷周史における様々な重要な問題について、文献資料ではうかがい知ることができない新しい知見を提供している。小南一郎「周代金文の社会的機能—祖先祭祀と国家機構」(科学研究費報告書, 1983)も、青銅器ならびにその銘文の宗教的意味体系を明かにしようとした注目すべき研究である。この他、松丸道雄、伊藤道治両氏にも、西周金文の本質を問いなおす論文があるが、それらは周王朝の構造の解明を直接意図したものであるので、次節でふれる。

2 殷周国家の構造に関する研究

(1) 殷周関係の問題

日本において、殷周史研究の最も大きな課題とされてきたのは、殷周国家の構造の解明である。ただし、戦後まもなくは、直接個々の国家の構造を問題とするよりも、殷と周の関係を論じる中でそれぞれの国家の在り方が問題とされた。王国維「殷周制度論」は、このような視角から最初に殷周国家の在り方を論じた、現在でも注目すべき論考であるが、早い時期に貝塚茂樹氏の批判がある⁽¹⁹⁾。王氏は、殷と周の国家制度の間に大きな断絶が存在することを強調したが、貝塚氏は王位継承法の検討などから、殷周の間にはむしろ連続する部分が認められることを主張した。貝塚氏は、殷周間の相違を全く否定するわけではないが、後の考えでも、どちらかと言うと、殷周を一まとめとして捉える傾向が強い。たとえば、氏の晩年の大著『中国古代国家』(『貝塚茂樹著作集1』中央公論社, 1976)では、殷周国家を「戦士社会」的性格を有する「古代国家」として一まとめに考え、春秋の「都市国家」と明確に区分している⁽²⁰⁾。

また、白川静氏も、貝塚氏と同様、殷周の断絶よりも連続性に注目している。氏も、両者の非連続性を否定するわけではないが⁽²¹⁾、「周初の対殷政策と殷の余裔」上, 下 (立命館文学79, 82:1951, 52)では、周公とともに周の支配を支えた召公を殷系の人物と考え、殷周革命は、政治的には氏族間の勢力関係の移動にすぎないとした。そして、「周初における殷人の活動」(古代学1-1, 1952)では、周における殷系氏族軍団の検討をもとに、西周中期になって殷文化

は周的文化の中に解消されるとしている。

日本においては、以上のように殷周間の連続性に注目する傾向が強いが、一方では松丸道雄「殷周国家の構造」(『岩波講座世界歴史4』岩波書店、1970)のように、王国維氏の考えにも再考の余地があるとする見方もある。殷周間の問題は、次にふれるように、それぞれの国家構造の具体的解明の中から、改めて問題にされる必要がある。

(2) 殷王朝の構造

戦後まもなく、最初に殷の国家構造の具体的解明を目指したのは白川静氏である。氏は、「殷の族形態」(説林2-1, 1950)、「殷の基礎社会」(立命館創立50周年記念論文集・文学, 1951)の両論文において金文の図象記号を検討し、殷の支配は、貞人集団、多子集団、多子族集団、多重集団など、氏族的、部族的組織を基盤とする職能的集団を中核として行なわれたとした。また、「殷の王族と政治形態」(古代学3-1, 1953)では、殷王室は王、王子からなる「子」、他氏族から嫁いできた王子の婦からなる「帚」で構成され、殷の地方支配はこれら「子」や「帚」の出自氏族との関係によって行なわれたとした。白川氏は、金文や甲骨文によって、殷の国家が氏族的、部族的な集団からなっていることを明かにしたが、殷の支配がいかなる原理で行なわれ、いかなる特色を有していたかについては、十分具体的に明かにしたとは言いがたい。こうした点を自覚し、上述の島邦男氏の祭祀系統の研究を踏まえながら国家構造の解明をさらに一歩進めたのは、伊藤道治氏と赤塚忠氏である。

伊藤道治氏の『中国古代王朝の形成』(創文社、1976)所収の3編の論文⁽²²⁾は、殷の国家構造研究の基礎を築いたものとして重要である。第一章は、甲骨文による祭祀制度の研究を歴史の研究へと進めたものであり、祖先崇拜の成立にともなって王権が確立することを論証した。第二章、第三章は対をなす論文であり、第一章の研究を踏まえて殷の国家構造の全体像を提示している。前者では、殷の外祭とされる自然神への祭祀と殷王室における貞人の在り方を解明することによって殷族とその服属諸族との関係を明かにした。すなわち、殷は、他族を祭祀を通して精神的に支配しようとした神聖国家であり、それ故、諸族の連合体というのが実体であり、きわめて不安定な国家であったとした。後者は、内祭とされる祖先祭祀を分析することによって、殷の中核である王室の構造を明かにしたものであり、王室も複数の血縁集団によって構成されることを論証した。氏は、殷を内外ともきわめて連合的性格の強い国家と規定するのである。

この殷の国家を連合的なものとする見方は、伊藤氏とほぼ平行して構想された赤塚忠氏の祭祀制度に対する研究とも一致する。赤塚氏は、『中国古代の宗教と文化』(角川書店、1977)所収論文において⁽²³⁾、殷で祭られた神々のうち、族神、先公神、巫仙、天神、上帝の性格を詳細に検討する。このうち族神は、もともと固有の族の神であり、殷の祭祀に統合されたものとし、先公神や自然神も本来族神とみなし、巫仙も異族の神とする。そして、これら異族の神々を含む殷の神々は、上帝によって統御され、上帝を中心とする祈年祭にまとめられていたとしてい

る。すなわち、殷は祭祀を通して間接的に諸族を統合していたと考えるのである。

上述のとおり、日本における殷代史研究は、1960年代以後、とくに『甲骨学』休刊後低調になるが、殷の国家を連合的なものとみる見方は受け継がれている。松丸道雄「殷墟卜辞中の田獵地について」(東大東洋文化研究所紀要31, 1963)は、殷の直接支配地の狭さを実証したものであるが、氏はここで、殷は多数の氏族的邑制国家の連合体であると規定している。また、氏は、後の「殷周国家の構造」(『岩波講座世界歴史4』岩波書店, 1970)では、「子某」や「帚某」の分析にもとづいて、殷は、服属諸氏族に対して、殷の先王の子として排行される擬制的親族関係や通婚による親族関係を設定したと考え、殷の秩序はこうした服属諸氏族が殷の祖先を祭祀することによって維持されたとした。ここでも、氏は殷の国家の連合的性格を強調し、巨大な王墓や大量人身犠牲の必然性を説明している。また、王室の構成の複数性についても一般に承認されているところであるが、持井康孝「殷王室の構造に関する一試論」(東大東洋文化研究所紀要82, 1980)は、殷王室は十干によって表示される十の父系血縁集団によって構成されていることを論証している。

殷の国家が、連合的性格を有していたことはもはや異論の余地はないと思われるが、その支配原理の特色についてはまだまだ検討の余地がある。上帝崇拜、そして中国史だけでなく世界史上もほとんど例を見ない大量人身犠牲、異常なほど執着された祖先祭祀など、殷に特徴的な現象をいかに国家構造論の中に組み込んで行くのか、問題とすべきところは多い。

(3) 周王朝の構造

先に『甲骨学』の休刊とともに、殷周史研究の重点が西周史に移ると述べたが、金文の本質にまで立ち戻って王朝の構造が検討されるようになるのは、1970年代後半以後である。まず、松丸道雄氏は、「西周青銅器制作の背景」(東大東洋文化研究所紀要72, 1977)、「西周青銅器中の諸侯制作器について」(東洋文化59, 1979)において、特定の金文の詳細な検討をもとに、青銅器には王室製作のものと諸侯製作のものとの区別があることを見出した。そして、西周金文の大半が王室側の起草にかかると考えられることから、金文は王が賜与を授けた諸侯に対して、その支配を確認させるものであるとみなした。すなわち、これは西周の国家において、周王の諸侯に対する支配の側面を重視する見方とすることができる。

これに対して、伊藤道治『中国古代国家の支配構造』(中央公論社, 1987)は、対照的な西周国家像を提示している。とくに、本書の第一章は、松丸氏に対する直接的批判となっており、「対揚」の意味を語法的に分析することによって、金文は通説のごとく、恩寵を受けた側の者によって作製されたものとした。すなわち、西周金文は、臣下が王の恩寵に対して忠誠を誓うための語と考えるのである。そして、以下の章では、具体的な制度、支配や裁判の在り方が検討され、西周の支配体制は、土地を基礎とし、王、諸侯、領主層の各段階での再生産を認めながら農民を収奪する封建的体制であり、それぞれの間には、恩寵と忠誠という相互的な封建制理念が働いていたと結論づけている。

両者の見方は現在でも対立したままである。松丸氏の使用した金文資料の特殊性と限定性、伊藤氏の西周封建制の時代性など、問題はいくつも存在すると考えられるが、対立の最も大きな問題点は、中国史における支配の具体的在り方、あるいは支配の概念そのものに対する考え方の相違である。この問題は、日本の中国史研究においては、西周史に限らず全時代にわたって存在する問題である。とくに、次章で述べる春秋戦国史研究、さらには秦漢史研究においてとくに顕著に認められる問題である。

この他、周王朝の構造にかかわる研究として注目されるのは、白川静「西周史略」(金文通釈46, 47, 1977。立命館文学377-8・382-3, 1977)である。この論文は、金文にもとづいて西周史全体の再構成を行なったものとして意義があるが、地域性を視野に入れている点でも注目される。また、近年注目されるのは、殷代史研究とは対照的に、若手の研究者が金文にもとづく国家構造、社会構造に関する研究を精力的に進めている点である。高山節也氏や豊田久氏の「天命」に関する研究⁽²⁴⁾、武者章氏の冊命金文の研究⁽²⁵⁾、河村原氏の邑、里の研究⁽²⁶⁾、木村秀海氏の官制、族制の研究⁽²⁷⁾、松井嘉徳氏の封建制の構造に関する研究⁽²⁸⁾など、多様な方面から研究が進められている。

III 春秋戦国史研究

戦後、日本における中国古代史研究の中心は、後の中国の歴史を強く規定し続けたと考えられる秦漢古代帝国の構造が如何なるものであり、それは如何にして形成されたかという問題であったといっても過言ではないであろう。したがって、春秋戦国時代、とくに秦漢時代に直接接続する戦国時代は、その形成期として強く意識されてきた。とりわけ、その傾向は秦漢史研究者に強く認められ、研究論文の数も多く、研究史の整理も多い。ここでは、秦漢史研究者、あるいは戦国秦漢史研究者による、この時代の捉え方のおおまかな変遷をたどり、現時点での問題の所在を明らかにする。そして最後に、秦漢史研究者とは独自の研究傾向を示す春秋史研究者の研究動向を紹介したい。

1 秦漢帝国の形成に関する研究

(1) 1960年代まで

専制的な秦漢帝国の構造とその形成過程の問題について、最も議論が高揚した時期は、1950年代から60年代初めにかけてである。この時期は、古代史研究が、中国史研究を理論的にリードした時期と言ってもよく、他の時代の研究に与えた影響はきわめて大きなものがあつた。西嶋定生「中国古代帝国形成の一考察—漢の高祖とその功臣」(歴史学研究141, 1949)は、このような研究の口火を切り、方向つけた論文である。氏は、この論文において、漢の高祖集団を、春秋時代以後形成されてくる家父長的家内奴隷制的豪族集団と同一の性格を有する集団と規定した。そして、続く「古代国家の権力構造」(歴史学研究会『国家権力の諸段階』, 1950)では、

氏の考え方は構造論的により整理した形で提示されている。すなわち、周代の氏族的共同体は春秋戦国期にしだいに崩壊していくが、生産力の不均等的発展によって、社会には家父長的家内奴隷制的な豪族が形成される一方、共同体的な遺制も残存する。そして、戦国から秦漢の国家権力は、このような前者が後者を経済外的に強制的に支配するところに成立すると考えるのである。氏がこの論文で示した論点は、以後、秦漢帝国形成論において問題となる論点をほとんど網羅していると言ってよい。

ところが、この西嶋氏の集団理解に対して、増淵龍夫氏が根本にかかわる批判を行なった。すなわち、「漢代における民間秩序の構造と任俠的習俗」(1951、『中国古代の社会と国家』弘文堂、1960)において、春秋戦国期に新しく形成されてくる集団を、家内奴隷制という普遍的概念で一義的に捉える前に人間関係の内面を具体的に検討すべきだとし、氏族制的秩序の崩壊後普遍的に形成される民間秩序として任俠的人的結合に注目した。しかし、このような民間集団の在り方は、一方的な支配の体系である秦漢の国家とは明らかに矛盾するものである。そこで、氏は「戦国秦漢時代における集団の「約」について」(1955、同上)において、人的結合関係の内面に一方的支配の存在を強調するとともに、「戦国官僚制の一性格」(1955、同上)では、人的結合関係と集権的な国家組織としての官僚制との連続性を論証しようとした。また、「先秦時代の山林藪沢と秦の公田」(1957、同上)、や「先秦時代の封建と郡県」(1958、同上)⁽²⁹⁾などでは、民間集団や古い勢力の上に、いかにして巨大な専制国家が成立してくるのかを問題とした論文であり、前者はとくにその経済的基盤の問題を検討している。なお、木村正雄『中国古代帝国の形成—特にその成立の基礎条件』(不昧堂書店、1965)も、農地の在り方から、このような問題を解明しようとしたものである⁽³⁰⁾。

ところで、1960年代に入ると、新しい展開が起こる。まず、西嶋氏が『中国古代帝国の形成と構造』(東大出版会、1961)において、改めて増淵氏の考え方を批判した。氏は、国家の問題は、増淵氏が重視している君主と官僚の関係にあるのではなく、君主と人民の関係にあると考え、二十等爵制を詳細に検討した。すなわち、氏族制崩壊にともなう古い里秩序の喪失が起こり個別化された人民が析出するが、伝統的な齒位による階級性をも合わせもつ爵制によってこれら人民に対する支配を実現したのが皇帝支配であるとした。西嶋氏の考えは、支配の正当性をも視野に入れた、きわめて隙のない構造論とみられたが、増淵氏は、「所謂東洋の専制主義と共同体」(一橋論叢47-3、1962)において、すぐさま批判した。西嶋氏が、皇帝支配の成立に古い里秩序の喪失を前提とした点、動きの取れない構造論とし、歴史の内在的發展を否定する停滞論とみなしたのである。そして、氏は、氏族制崩壊後、民間には自然に土豪、豪族の自律的秩序が形成され、こうした秩序が国家権力を規定すると考えた。ただし、この氏の考えは、主として六朝以後を視野に入れたものであり、漢の武帝以前の国家権力と土豪、豪族の自律的秩序は対置されたままである⁽³¹⁾。

宇都宮清吉「管子弟子職篇によせて—古代専制体制と社会集団との関係」(名古屋大学文学部

研究論集29, 1962)も、増淵氏と同様、国家権力と社会集団を対置する見方である。ただし、宇都宮氏は、両者を氏族制的宗法秩序解体後に新たに出現する人間把握の二つの型ととらえ、より理念的に考えている。すなわち、氏族制的宗法秩序の解体後、墨家に体现される一方的支配従属関係としての「首領制」と、儒家に体现される自然な家族関係にもとづく「家族制」が出現し、両者が矛盾的相互媒介されながら統一を形成したのが秦漢の歴史と考えた。しかし、ここではその統一の具体的原理は明らかにされていない。

(2) 1970年代以後

1960年代初めまでの秦漢帝国形成論には、二つの立場が存在した。すなわち、西嶋氏や初期の増淵氏のように、強力な専制権力がいかに形成されるのかを主要な問題関心とする立場と、後の増淵氏や宇都宮氏のように、専制権力に対して自律的な社会集団を対置し、両者の関係の中で秦漢帝国の形成を考えようとする立場である。この立場の相違は、具体的な社会集団に対する認識の相違とともに、支配の概念そのものに対する考え方の相違から来していると考えられるが、1960年代後半以後、後者の考え方が主流となり、秦漢史研究者による両者の関係の統一の把握の試みが続けられる。好並隆司氏の秦漢帝国二重構造論などはその代表的な研究である⁽³²⁾。

しかし、その後は新しい理論的展開は見られず、研究者はしだいにより具体的な実証研究に傾斜して行く。1970年代に顕著となる、地域性を考慮した研究は、こうした傾向の中での一つの模索と考えられる⁽³³⁾。太田幸男氏の「斉の田氏について」(歴史学研究350, 1969)を初めとする一連の研究は⁽³⁴⁾、田斉と秦の社会形態の相違を検討することによって秦漢帝国の形成過程を解明しようとしたものである。また、古賀登「尽地力説考」(1976, 『漢長安城と阡陌・県郷亭里制度』雄山閣, 1980)、好並隆司「中国における皇帝権の成立と展開」(思想1978-2)なども、東方諸国と秦とを対比することによって、秦がなぜ天下統一をすることができたかを明らかにしようとしたものである。しかし、このような地域的な比較研究も、秦に比べて東方諸国にかかわる史料の乏しさによって、限界があるように思われる⁽³⁵⁾。

1980年代以後、秦漢帝国の形成される場の問題として、戦国時代の都市の研究が盛んとなる。戦国から前漢にかけて、都市の発達が発達が顕著であることは周知の事実であるが、日本においては発達の要因に対して二つの見方がある。一つは、宇都宮清吉「西漢時代の都市」(1951, 『漢代社会経済史研究』弘文堂, 1955)のように、経済的な要因を重視する見方であり、もう一つは、宮崎市定「戦国時代の都市」(1962, 『アジア史論考・中』朝日新聞社, 1976)のような、政治的、軍事的な要因を重視する見方である。後者の宮崎氏は、この時代の都市は国家の中央集権的政策により外在的に発達させられたものとするのであるが、このような見方は、現在多くの研究者に受け継がれている⁽³⁶⁾。しかし、江村治樹「戦国時代の都市とその支配」(東洋史研究48-2, 1989)は、二つの見方の相違は都市発達の地域的な差によるものと考えた。すなわち、中原地域には経済的な要因により自律的な都市が発達し、その周辺の未発達な都市は中央集権的

に支配されたとし、両者の関係の中で秦漢帝国の形成を考えるべきだとした。

秦漢帝国の形成を考える場合、地域的な視点が必要なことはすでに共通した認識となっている。しかし、性格を異にする地域から、如何にして秦漢帝国が形成されてくるのか、いまだ理論的に明らかにされているとは言い難い。この点、1960年代までに、西嶋、増淵、宇都宮の三氏が提起した問題は未解決のままである。春秋戦国期に成長してくる独自の社会集団の存在を視野に入れる限り、これまで一方的な支配の体系としてア・プリオリに設定されてきた専制支配の概念そのものの再検討も必要のように思われる。

2 春秋史研究

(1) 1970年代まで

春秋史研究は、戦国秦漢史研究に対して独自の位置にあると述べたが、それは、『左伝』『国語』という史料価値の高いまとまった分量の文献史料が存在することによるところが大きい。そして、春秋時代の前後の時代には、そのような文献資料が存在しないため、前後の時代を見通す位置にあることも、その研究の在り方を規定しているように思われる。

さて、戦後、1970年代までの春秋史研究はあまり盛んとは言えない。研究者の数も少なく、論文も多くないが、秦漢帝国研究の高揚の影響を受けて、この時代を変動期として強く意識した論文が目立つ。早い時期には、松本光雄氏に、『左伝』『国語』に見える用語の分析により、春秋初期までの社会構造とそれ以後の変化を明らかにした一連の論文がある。「中国古代の邑と民・人との関係」(山梨大学学芸学部研究報告3, 1952)は、「人」と「民」の語の意味の変化から、邑の内部構造とその変化を明らかにした重要な論文であるが、その後の論文でも、「宗」「賦」「室」「族」の語の意味変化の分析から社会構造の変化の解明を進めている⁽³⁷⁾。

その後の小倉芳彦『中国古代政治思想研究—「左伝」研究ノート』(青木書店, 1970)も、春秋期の変動を見据えた上での研究である。氏は、『左伝』が成立時期の異なる三つの性格の異なる部分から構成されていることを明らかにした。そして、この構成上の相違を手掛りに、「徳」「賄」「質」「夷」「貳」「叛」などの用語の分析を行ない、春秋期の社会の特質とその後の変化の解明を進めた。宇都木章氏には、早くに宗法制は春秋以後に確立したとする問題論文があるが⁽³⁸⁾、その他に「鄭の七穆」(『中国古代史研究3』吉川弘文館, 1969)など、春秋時代に抬頭する世族の動向を国別に追究した論文がある⁽³⁹⁾。氏の国別研究が行なわれた時期は、秦漢帝国の地域的研究が進行した時期とほぼ重なっており、全体的構造研究から地域的個別研究への傾向は、日本における中国古代史研究の一つの流れとみなすことができる。

(2) 1980年以後

1980年前後から、新しい世代の研究者が増加し、多様な研究が行なわれるようになる。強いてその研究動向を整理すれば、宇都木氏以来の国別研究と、松本光雄、増淵龍夫氏以来の社会構造論に対する再検討という二つの方向が認められる。まず、前者の国別研究は、個人が守備

範囲を決めてより精密に分析する傾向が強くなっている。佐藤三千夫氏の晋の軍制の研究⁽⁴⁰⁾、安倍(斎藤)道子氏の楚の王権の研究⁽⁴¹⁾、平勢隆郎氏の晋県や楚県の研究⁽⁴²⁾、谷口満氏の楚県や都市の研究⁽⁴³⁾などである。

後者の研究としては、諸侯国内の人間関係、すなわち公、世族と私臣、国人との関係を再検討した吉本道雅氏の論文がある⁽⁴⁴⁾、また、高木智見氏は、春秋期を単に変動期として捉えるのではなく、一つの完結した時代と考え、春秋国家は神・人共同体とする一連の研究がある⁽⁴⁵⁾。

戦国以前の歴史の捉え方について、殷周史研究者と秦漢史研究者の間に断絶が存在することを初めに述べたが、この断絶を埋める上で、春秋史研究者の果たす役割は大きいと思われる。しかし、高木氏を含め、春秋史研究者は後の戦国期を視野に入れている研究者は多いが、前の西周期に対する意識は稀薄のように思われる。今後、春秋史研究者と西周史研究者は密接に連携して、氏族制の問題を初めとして、西周から春秋にかけての社会構造の解明を進めていく必要があるであろう。

[附記] II殷周史研究の部分については、一部分、伊藤道治先生の助言を受けた。また、1989年に台湾大学で開催された『民国以来国史研究的回顧与展望研討会』で、先生が報告された「近十余年間の日本における甲骨文・金文の研究」の原稿を参照させていただいた。末尾ではあるが、ここにお礼申し上げたい。

なお、本稿はもともと、中国で出版される劉俊文主編『日本学者研究中国史論著選訳』(中華書局)第三卷「上古秦漢」の「上古前言」として、中国の研究者に日本の研究状況を紹介するために書かれたものである。そのため、日本の研究者にとっては常識と思われるところも敢えて説明したところもある。ただ、日本における殷周史研究や春秋史研究の研究史的整理はまだ十分行なわれていないとは思われないので、劉俊文氏ならびに中華書局の了承を得て、一部修正を加え日本語でも公表することとした。

注

- (1) 貝塚茂樹『中国の古代国家』(1952, 『貝塚茂樹著作集2』中央公論社, 1977), 同「中国古代都市における民会」(1954, 同上), 宮崎市定「中国上代は封建制か都市国家か」(1950, 『アジア史研究3』同朋社, 1957), 同『中国古代史概論』(1955, 『アジア史論考・上』朝日新聞社, 1976), 同『中国史・上』(岩波書店, 1977)など。
- (2) III春秋戦国史研究の1参照。
- (3) 殷周史研究者の中にも、伊藤道治氏のように、中国の都市は最初から領域を有し、ギリシャ的な都市国家とは異なると思なす研究者もいる(『中国社会の成立』(講談社新書, 1977))。一方、秦漢史研究者の中にも、宇都宮清吉氏のように、中国の都市国家における氏族制の強さを重視し、邑制国家として区別すべきだとする研究者もいる(『古代帝国史概論』(『漢代社会経済史研究』弘文堂, 1955))。ただし、伊藤氏は、秦漢史研究者らが氏族制の解体を春秋期に設定するのに対して、殷代にすでに崩壊していたとしている(「殷以前の血縁組織と宗教」(東方学報<京都> 32, 1962), 『アジア

- 歴史研究入門1』I (同朋者, 1983))。
- (4) 1976年に11号, 1980に12号が再刊されるが, 以後続号は出ていない。
 - (5) 「甲骨文字書体の変遷」(1940, 『貝塚茂樹著作集4』中央公論社, 1977)
 - (6) 後に, 「禘祀」と「殷代の社会」(地域, 方国, 封建, 官僚, 社会, 産業, 暦法)を加えて, 『殷墟卜辞研究』(中国学研究会, 1958, 影印: 汲古書院, 1975)として刊行。
 - (7) 後に, この中から10篇を選んで, 『甲骨金文学論集』(朋友書店, 1973)として刊行。
 - (8) 「麦字考—殷代武丁期卜辞に見える麦栽培について」(東方学58, 1979)。
 - (9) その後『増訂殷墟卜辞綜類』(汲古書院, 1971)が出されている。なお, 台北の歴史語言研究所では, 本書を基礎として, それ以後発見された甲骨をも含めて増補が進められている。
 - (10) 小川陸之輔(東方学報<京都> 37, 1966), 大原美術館(倉敷考古館研究集報4, 1968), 藤井有隣館(東方学報<京都> 42, 1971), 桧垣元吉(神戸大学文学部紀要1, 1972), 関西大学考古資料室(史泉51, 1977), 内藤湖南(『甲骨文字研究』同朋社, 1980), 国立京都博物館(文化学年報<神戸大学> 3, 1984), 黒川古文化研究所(同左), 天理大学附属天理参考館(『ひと・もの・こころ5 甲骨文字』天理教道友社, 1987)
 - (11) *Negative in the King Wu ting Bone Inscription*, University of Washinton, 1973. Existence vs. Reference; Decipherment of the Word 出/又/有 in Oracle Bone Inscription and Pre-Classical Chinese, *Early China* 4, 1978.
 - (12) 「有関語詞「重」的用法問題」(古文字研究6, 1981)など。
 - (13) 「甲骨文における書体とは何か」(書道研究88-12, 1988)
 - (14) 「金文の編年的研究」(『中国古代史学の発展』弘文堂, 1946。『貝塚茂樹著作集4』中央公論社, 1977)
 - (15) 同氏には, 春秋中期~戦国時代の青銅器の形式学的編年として, 別に『春秋戦国時代青銅器の研究—殷周青銅器綜覧3』(吉川弘文館, 1989)があり, また文様について『殷周時代青銅器紋様の研究—殷周青銅器綜覧2』(同, 1986)がある。
 - (16) 『金文通釈』44, 45(白鶴美術館, 1975)
 - (17) 「西周金文と暦」(東方学報<京都> 57, 1986)
 - (18) 伊藤道治「永孟銘考」(神戸大学文学部紀要2, 1978), 「盩彛銘考」(同6, 1977), 「裘衛諸器考」(東洋史研究37-1, 1978), 松丸道雄「西周後期社会にみえる変革の萌芽—魯鼎銘解釈問題の初歩的解決」(『東アジア史における国家と農民』山川出版社, 1984)など, 個別銅器の銘文解釈は限られている。
 - (19) 『中国古代史学の発展』(弘文堂1946, 『貝塚茂樹著作集4』中央公論社, 1977)第二部, 第三章, 第二節「殷周革命の本質」
 - (20) 貝塚氏は, これ以前では, 殷と周の国家の性格の違いに注意を払ってはいるものの, 殷周, 春秋を大きく一括して都市国家の時代とみなしている(注(1)『中国の古代国家』, 「中国古代都市国家の性格」(1958, 『貝塚茂樹著作集2』中央公論社, 1977))。
 - (21) 「衣祀考」(説林2-4, 1950)では, 周の衣祀と帝祀の混乱から, 殷周の社会組織, 家族構造, 継統法上の相違を予測している。
 - (22) 原載は順に, 「卜辞に見える祖霊観念について」(東方学報<京都> 26, 1956), 「宗教面から見た殷代の二, 三の問題」(東洋史研究20-3, 1961), 「殷代における祖先祭祀と真人集団」(研究<神戸大学> 28・1962)
 - (23) 原載は, 「殷王朝における河祭祀とその起源」(甲骨学4・5, 1956), 「殷王朝におけるの祭祀と中国における山岳信仰の特質1」(甲骨学6, 1958), 「甲骨文に見える「土」について」(『高田博士古稀記念論文集』1963), 「殷代における祈年の祭祀形態の復原・上下」(甲骨学9・10, 1961, 64), 「殷

- 代における上帝祭礼の復原」(二松学舎大学論文集・1966)
- (24) 高山「西周国家における「天命」の機能」, 豊田「周王朝の君主権の構造について—「天命」の膺受者を中心に」(松丸道雄編『西周青銅器とその国家』東京大学出版会, 1980)
- (25) 「西周冊命金文分類の試み」(同上)
- (26) 「西周時代の邑と里について」(史叢30, 1983)
- (27) 「西周官制の基本構造」(史学雑誌94-1, 1985) など。
- (28) 「西周期郎(震)の考察」(史林69-4, 1986) など。
- (29) 本論文は、「春秋時代の県について」(一橋論叢38-4, 1957) を展開したものである。
- (30) 本書は、その構想はすでに「中国古代専制主義とその基礎」(歴史学研究217, 1957)に見られ、「中国古代における地域と生産体—前後漢代における県の置廃を通じて見た」(社会経済史学27-3, 1961) などをもとに展開されたものである。
- (31) 後の「春秋戦国時代の社会と国家」(『岩波講座世界歴史4』岩波書店, 1970)でも同じ。ただし、在地の社会集団は支配を支えるとともに抵抗の可能性も内包したとし、その関連性をより明確に考えている。
- (32) 「前漢帝国の二重構造と時代規定」(歴史学研究375, 1971)
- (33) 地域的な視角は、すでに西嶋, 増淵, 木村氏などにも見られる。ただし、それは旧県, 新県といった県単位のもので、その分布傾向は注目されてはいるものの、戦国国家の個々の在り方の差異は問題とされていない。
- (34) 「田齊の成立」(『中国古代史研究4』雄山閣, 1976), 「田齊の崩壊」(史海21・22, 1975), 「商鞅変法の再検討」(歴史学研究別冊特集『歴史における民族の形成』1975), 同「補正」(歴史学研究483, 1980)
- (35) 史料の残存度が高い秦の研究は多く、とくに商鞅変法の研究は盛んであり、千葉茂雄「商鞅変法研究史小論」(史潮200, 1967), 太田幸男・注(34)の「商鞅変法の再検討」など研究史整理がある。これに対して、東方六国に関する国別研究はきわめて乏しい。
- (36) 伊藤道治「先秦時代の都市」(研究<神戸大学>30, 1963), 影山剛「中国古代における都市と商工業」(1979, 『中国古代の商工業と専売制』東京大学出版会, 1984), 池田雄一「中国古代集落の展開」(歴史学研究別冊特集『地域と民衆』1981), 五井直弘「城市の形成と中央集権体制」(歴史学研究別冊特集『民衆の生活・文化と変革主体』1982), 佐原康夫「戦国時代の府・庫について」(東洋史研究43-1, 1984) など。
- (37) 「中国古代社会に於ける分邑と宗と賦について」(山梨大学学芸学部研究報告4, 1954), 「中国古代の「室」について」(史学雑誌65-8, 1956), 「中国古代の族について」(歴史学研究260, 1961)
- (38) 「西周諸侯系図試論—春秋戦国諸侯系図より見た」(『中国古代史研究2』吉川弘文館, 1965)
- (39) 「春秋時代の宋の貴族」(古代学16-1, 1965), 「魯の三垣氏に成立について」1, 2 (『中国古代史研究4』雄山閣, 1976. 『同5』同上, 1982)
- (40) 「晋の文公即位をめぐる一とくに三軍成立との関連において」(白山史学, 1973) など。
- (41) 「春秋時代の楚の王権について—荘王から靈王の時代」(史学50, 1980) など。
- (42) 「春秋晋国世族とその管領邑」(鳥取大学教育学部研究報告<人文・社会科学>33, 1982) など。
- (43) 「春秋楚県試論」(北海道教育大学人文論究47, 1987) など。
- (44) 「春秋国人考」(史林69-5, 1986)
- (45) 「春秋時代の血盟習俗について」(史林68-6, 1985), 「春秋時代の神・人共同体について」(中国—社会と文化5, 1990) など。